

聖書:エペソ人への手紙4章1～6節

説教:神はただひとりです

はじめに

日本ではたくさんの神がいて、それぞれ専門分野があって、自分の悩みに合わせて拝む神さまを取り替えます。ある大学の先生が、「このような戦争の時代にこそ、日本人は神々が平和に共存しているこの文化を世界に紹介していく役割がある」と言っていました。みなが不安になっているときですから、なんとなく説得力があります。しかし今日開いている聖書には、はっきりと「神はただひとりです」と書いています。これを聞いて、「だからキリスト教は窮屈できらいだ」という方もいます。好き嫌いで済むのならよいのですが、ことは私たちのいのちに関わる問題です。結論から述べれば、神がおひとりでなかったら私たちは一つになることはできない。おひとりであるからこそ、一つとなって真の平和をいただくことができる。今日はそのことを考えてまいります。

1 召された召し

1) 私からではなく

たとえば車とか家とか、大きな買い物をするとき、いろいろ慎重に調べてから決めます。では宗教についてはどうでしょうか。いろいろな宗教のカタログを取り寄せ、いろいろな人の話を聞き、それぞれメリット・デメリットの一覧表を作り点数をつけ、一番得点が高いものを選ぶのか。そんなふうにして決める方はいないでしょう。最も多いのが、友人に誘われて教会に来たという方でしょう。そのときはおそろおそろ教会に足をいれた。けれどもクリスチャンになることについては自分で判断し、自分で決めたと思っておられる。

2) 神に呼ばれた

では聖書にはなんと書いてあるか。1節後半。「あなたがたは、召された召しにふさわしく歩みなさい。」神が私たちを召してくださった、ご自分の方へ呼んで招いてくださったというのです。私の育った家は仏教だったのに、なぜ自分がクリスチャンになったのか。考えてみれば不思議なことです。どうしてこうなったのか。自分で決断し、自分の口でイエス・キリストを救い主と信じますと告白したのは確かでしょう。でも聖書によれば、神

が私を呼んでく招いてくださらなかったなら、私がクリスチャンになることはなかったというのです。

3) 十字架

私たちはこの神の招きに応答しました。なぜ応答できたのか。御子イエス・キリストはどのようにしてくださったのでしょうか。イザヤ書53章7節。「彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前に黙っている目羊のように、彼は口を開かない。」私たちは、十字架につながれたイエス・キリストを仰ぎ見ました。イエス何も語りません。けれども、十字架は多くのことを語りかけます。あの十字架は私のためであったと、強く迫ってきました。気がつけば十字架の前にひれ伏して、私はあなたに背いた罪人でしたと告白していました。このようにして、私たちは主の十字架のもとに招かれていたのです。

2 ふさわしく歩む

1) 互いに耐え忍ぶ、一致を熱心に保つ

招かれて終わりではなく、むしろ始まりです。主に招かれた私たちはどのように歩むことになるかを考えることになる。パウロは二つのことを強調しています。一つ目は、愛をもって互いに耐え忍ぶように。二つ目は、御霊による一致を熱心に保ちなさい。この時代は耐え忍ぶということは人気がありません。タイパとかコスパ、最近ではメンパということばも出て来た。できるだけ早く、安く、そして楽にということで、ひとことでいえば面倒なことは避けたい。それが世の常識です。どれくらい常識なのかということで、ためしに最近話題のAIにこんな質問を試してみた。「職場で意見があわず衝突している人がいます。どうしたらよいか。」そうしたら、こんな答えが返ってきた。「その人と距離をとりなさい。仕事とわりきって余暇を楽しみなさい。」これが世の常識というわけです。ところが私たちは、世の常識に反して互いに耐え忍び、御霊による一致を熱心に保つことを目指していくのだというのです。

2) 召された者にふさわしく

なぜでしょうか。「あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。」私たちが神を

選んだのではなく、神が私たちを選んでくださった。だから、私たちは神の召しにふさわしく歩むのだということです。

ここから二つのことが言えます。一つ目は救われる前の自分はどうかであったかです。神がどうしてこの自分を選ばれたのかはわかりません。わかっているのは、選ばれるのにふさわしい資格はなかったということです。先ほどのAIの答えのように、職場で困った人がいたなら関わらない、割り切る、そういうことを当たり前として生きてきた。これが一つ目に言えることです。

二つ目は、救われた後のことについて。救われる資格がない私たちは、救われた後どう歩んでいくか。これまでのとおり、というのではない。変えられていく。どう変えられるか。嫌な人からは距離をとってとか、割り切ってとか、そんなふうの問題から逃げるのではなく、むしろ互いに耐え忍び、一致を熱心に保つ方向を目指していく。もちろん、すぐに出来ることはありません。何度も失敗するでしょう。それでも一つとなる方向を目指していく。これが召された者にふさわしい歩みだということです。

念のため付け加えておきますが、これは無理にせよというのではない。たとえば預言者エリヤもそうだったように、燃え尽きたときは休みなさい。そこは誤解しないでください。

3 神はただひとり

1) 互いの違いはあっても

とはいえ、「耐え忍べ」とか「御霊による一致を熱心に保て」といわれても、なかなか難しい。具体的にどうしたらよいのかを知りたいわけ。

似たもの同士とか、好みが合うような人たちをだけなら悩まないかもしれませんが、たとえば教会を見ても「よくまあ」と思えるほど個性豊かな方々が集まっています。また教会によっては、様々な言語を語る人たちが集まることもあります。普通ならこんな人とはお付き合いしないだろう。そういう人も集まる。信仰がない人でさえ、これは大変なことだと思ってしまうでしょう。それでも一つとなることを目指す。本当にできるのでしょうか。

2) もし神がたくさんいたら一つとなるモデルがない

ここで最初の問題に戻ります。なぜ神はただおひとりなのか。日本のようにたくさんの神々がいて、どうしてだめなのでしょう。ところがパウロはことさらに一つであることを強調するのです。「か

らだは一つ、御霊は一つです。主はひとり、信仰は一つ、バプテスマはひとつです。」

こういうとき、反対のことを考えてみるとわかることがある。もしこの世界が、からだも御霊も主も、二つでも三つでもたくさんありますということだったらどうなるか、そんなふうを考えてみるのです。ある先生は、すばらしい文化だといっていました。結論からいえば、大きな間違いです。仮に世界には神が二人以上いるとしましょう。そんな世界でけんかをしていた人たちが仲良くしましよと話し合うことにした。そのとき人は、仲良くするというモデルをどこかに求めることとなります。自分たちにはありませんから、結局神に求める。ところが二人の神がいるのですから、二人が一つになるという発想は絶対になりません。二人はいつまでも二人のままで、一つになることはない。結局、どこかの夫婦のように不満はあるけれど離婚もしない。けんかはしなくても、冷戦状態。せいぜいよくてもそういう関係にしかならない。夫婦がこうですから、国のレベルで考えても同じことです。もし神が二人以上いるということであるなら、こんな結果しか生まれません。

しかし聖書には何と書いてあるか。神が造られたアダムとエバという夫婦、このふたりは一体となるのである、と書いてある。なぜ一体となれるか。神がおひとりだからです。そのような方を、私たちは理想のモデルにすることができる。

3) 人知をはるかに超えたキリストの愛

ところが現実はどうか。この世界はねじ曲がりました。人と人が憎み合い、戦争が続いています。世間では、神がひとりしかいないから戦争が起きたと言っていますが、とんでもない誤解です。アダム以来、人間が神に逆らい、神に対して罪を犯した結果、こうなりました。

私たちには希望はないのでしょうか。あります。私たちにキリストの愛が示されました。2章15、16節。「こうしてキリストは、この二つをご自分において新しいひとりの人に造り上げて平和を實現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

ですから私たちはたとえこの世界に争いが満ちて、戦争のうわさを聞くことがあっても、失望しません。おひとりの神であるキリストが、十字架で私たちの罪の身代わりとなられてさばきを忍耐されたことを知っています。このおひとりの神に召された私たちは、私たちの模範となられたキリス

トの後をたどっていきます。罪人のためにいのちを
捨ててくださったキリストの愛が注がれました。
その愛は私たちのなかでとどまることはありません。
皆さんを通して、こんどは罪に苦しむ人たちに
伝えられていきます。こうして争いの絶えない不毛
な地に、平和の種が蒔かれていく。私たちはその
ために召されました。